所謂腦下垂體前葉ホルモン・プロランノ血小板數ニ及ボス影響……(別府)

二二〇

所謂腦下垂體前葉ホルモン・プロランノ

血小板數ニ及ボス影響ニ就テ

第四篇 甲狀腺トノ關係ニ就テ

京都帝國大學醫學部內科第一講座
大學院學生 醫學士 別府 聖

目次

第一章 緒言	第二節 甲狀腺剔出家兎血小板數ニ及 ボスプロラン連續注射ノ影響
第二章 實驗材料並ニ實驗方法	第四章 總括並ニ考按
第三章 實驗成績	第五章 結論
第一節 甲狀腺剔出ニヨル家兎血小 板數ノ變動ニ就テ	主要文獻

第一章 緒言

余ハ既ニ妊婦尿ヨリ得タル所謂腦下垂體前葉ホルモン・プロランニハ性成熟ホルモンノ外ニ造血機能ニ影響シテ血小板數ヲ増加セシムル物質ヲモ含有シ該物質ノ作用機轉ニ關シテ生殖腺トハ無關係ナル事ヲ闡明セシガ、然ラバ斯ル血小板増加ハ如何ナル機轉ニ由レルヤ、抑々造血機能ハ諸種內分泌腺ト密接ナ關係アリトハ諸家ノ認ムル處ニシテ、殊

ニ血小板ニ關シテ甲狀腺、腺臟、副腎、生殖腺、上皮小體、脾、肝等ノホルモンガ關係アリトハ多數ノ業績ノ示ス處ナリ、茲ニ甲狀腺トノ關係ヲ見ルニ甲狀腺機能亢進ハ血小板數ヲ増加セシメ、ソノ低下ハ之ヲ減少セシムト、而シテソノ作用ハ骨髓ヲ刺戟スルニ因スト説ケリ。他方**プロラン**ノ作用機轉ニ關シテハ或ハ甲狀腺ヲ介ストモ或ハ脾臟ヲ介シテ發現ストモ論ゼラル、所ナリ。茲ニ於テ余ハ本篇ニ於テハ甲狀腺ガ**プロラント**如何ナル關係ニアルヤヲ知ラントシテ本實驗ヲ企圖セリ。

第二章 實驗材料並ニ實驗方法

實驗動物ハ凡テ雄性成熟家兎ノミヲ擇ビタリ。ソノ體重ハ二疋内外ニテ、實驗動物ニ關スル注意、飼育法等ハ従前ノ余ノ實驗ニ於ケルト同様ナリ。又使用セシ**プロラン**ノ製法、用法、血小板算定法等モ亦同様ナレバ茲ニ贅セズ。甲狀腺全剔出方法ハ當教室在來ノ法ナルヲ以テ記サズ。

第三章 實驗成績

第一節 甲狀腺剔出ニヨル家兎血小板數ノ變動ニ就テ

甲狀腺剔出ニ因ル血小板數ノ變動ニ就キテハ Rosenbaum, W. S. Levit 錦織、祝、網島等ニ依リテ人又ハ動物ニ於テ血小板數ノ減少スル事ヲ報告セラレタリシガ、是等ハ剔出後數回ノ檢索ニ止リ、石田ガ十日間逐日檢査スルノミ、僅カニソノ變動狀況ヲ窺フニ足ル報告アルニ過ギズ。是等諸家ノ成績ハ何レモ剔出ニヨリテ血小板數ノ減少スル點ニ於テ一致セルモノノ變動ノ狀況並ニ減少ニ至ル時期ニ關シテハ一致セズシテ未ダ詳述ナキ憾アリ。ヨツテ余ハ剔出後血小板數ガ略々一定ニ至ル時日並ニ變動ノ狀態ヲ一ヶ月間隔日

所謂腦下垂體前葉ホルモン・**プロラン**ノ血小板數ニ及ボス影響……(別府)

第一表 甲状腺剔除ニヨル血小板數ノ變動

経過 日數	室 温 (°C)	I	II	III	IV	V
		血小板數 (萬)	血小板數 (萬)	血小板數 (萬)	血小板數 (萬)	血小板數 (萬)
前	21°	49.0	92.0	55.0	45.5	58.0
甲 状 腺 剔 出						
1	20°	48.0	43.0	34.3	39.7	29.0
2	20°	46.3	38.6	40.3	38.2	32.3
3	21°	45.3	35.0	36.3	35.3	30.6
4	22°	40.6	30.0	33.3	35.0	31.6
5	21°	40.3	31.6	30.6	32.6	29.3
6	21°	38.0	30.6	32.3	33.0	23.3
7	22°	36.3	28.6	29.6	31.6	25.0
8	20°	34.6	30.0	29.0	32.0	24.0
9	21°	32.6	29.3	28.0	32.3	24.3
10	21°	32.6	30.0	29.3	31.3	24.6
12	22°	30.6	32.6	28.6	32.0	23.6
14	22°	30.6	29.3	28.3	30.6	24.0
16	21°	28.0	29.0	29.3	30.6	22.6
18	21°	26.0	30.0	28.0	31.6	22.6
20	22°	26.3	30.3	26.3	28.0	23.0
22	22°	25.6	30.6	28.6	28.6	23.0
24	22°	26.0	28.6	27.0	27.0	21.6
26	21°	23.0	31.6	26.3	28.3	22.0
28	20°	23.3	30.0	26.0	25.6	21.6
30	22°	22.6	31.3	26.3	24.0	22.3

所謂腦下垂體前葉ホルモン・プロランノ血小板數ニ及ボス影響……(別府)

第一圖 甲状腺剔除ニヨル血小板數
變動ノ平均増減率

ニ血小板ヲ算定シテ之ヲ窺ヒ次ノ實驗ニ資セリ。

即チ約二週間飼育後甲状腺ヲ全剔出セシ五例ノ家兎ヲ擇ビ隔日早朝ニ血小板ヲ算定セリ。尙、食餌投與ハ大體正午ニ行ヒテ食餌ノ影響ヲ避ケタリ。ソノ成績ハ**第一表**ニ示ス如ク、剔出後第一日目ニ於テ既ニ著シキ減少ヲ示セルモノ四例ニテソノ血小板數ハ剔出前ノ二分ノ一乃至三分ノ二トナレリ。之等ハ更ニ十日目マデ漸減シ、ソレヨリ後ハ減少ハ僅少ニテ且ツ極メテ除ヲトナリ二十日目頃ヨリハ略々一定セリ。他ノ一例ハ剔出ニヨリテ直チニハ著變ナク除々ニ減少ヲ見タルガ本例モ二十日目頃ヨリ略々一定セリ。而シテ之等血小板數ノ減少ハ剔出前値ニ對シテ四六%乃至六八%ノ減少ヲ示セリ。

以上ヲ遂日ソノ増減率ヲ五例平均シテ増減率平均ヲ以テ甲状腺剔出後ノ血小板變動ヲ圖示セバ**第一圖**ノ如シ。

之ニ依リテ觀ルニ血小板ハ甲状腺剔出ニヨリテソノ翌日早クモ著減ヲ來シソノ後モ比較的除々ナルモ減少ヲ續ケ一ヶ月後ニ到リテソノ減少ハ停止スル如シ。血小板數ハ剔出前ノ平均約半數トナルヲ知レリ。

之ヲ諸家ノ成績ニ比較スレバ剔出ニヨリテ血小板ノ減少ヲ來ス點ニハ余モ一致シ、ソノ減少ガ剔出後二十四時間乃至七十二時間ニ於テ甚ダシク四一%乃至七〇%ノ減少率ヲ示スト云フ、**石田**ノ所報ト略々一致セシガ七十二時間ヨリ恢復シ始ムトナス、**石田**ノ所報トハ異リ尙ホ減少ヲ續クルモノニテ此ノ點ハ**錦織**、**祝**等ト一致セリ。

第二節 甲状腺剔出家兎血小板數ニ及ボスぶろらん連續注射ノ影響

前節ニ於テ甲状腺剔出ニヨル甲状腺機能脫落ハ約一ヶ月後ニ完全トナルヲ知レリ、ヨツテ五例ノ雄性家兎ノ甲状腺ヲ全剔出セシ後一ヶ月前後ヲ經過シタルモノヲ擇ビテ實驗ニ供セリ。**ブロラン**ハ妊婦尿原一〇氈ニ相當スル**ブロラン**末ヲ一氈ノ蒸溜水ニ溶カシテ皮下ニ注射シ之ヲ家兎一匹一回量トセシ事余ノ是迄ノ實驗ト同様ナリ。而シテコノ注射ヲ十日間連續行ヒテソノ影響ヲ檢セリ。食餌投與ノ時刻ハ本實驗ニ於テモ大體正午頃トセリ。血小板算定ハ毎早朝空腹時ニ之ヲ行ヘリ、ソノ成績ハ**第二表**ニ示ス如シ。

即チ**第一例**ニ於テハ注射後第一日目稍々増加ハ示セドモ、尙ホ動搖範圍内ニアリトモ云ヒ得ベキ狀態ナルガ二日目ヨリハ判然ト増加シ始メ五日目最高ニ達シ、ソノ増加ハ一五七・二%ト云フ著シキ増加率ヲ示セリ、以後稍々減ジタルモ大體一一〇%ノ増加率ヲ保持

所謂腦下垂體前葉ホルモン・**ブロラン**ノ血小板數ニ及ボス影響……(別府)

所謂腦下垂體前葉ホルモン・プロラン・血小板數ニ及ボス影響……(別府)

二二四

第二表ノ一

第二表ノ二

第二表ノ三

I				
経過 日數	室温 (°C)	體重 (單位 瓦)	血小板數 (單位 萬)	増減率 (%)
前	17	2100	39.0	0
プロラン十日間注射開始				
1	19	45.0	15.4	+
2	20	50.6	29.7	+
3	20	76.3	95.6	+
4	20	97.8	150.8	+
5	18	2050	157.2	+
6	21	100.3	105.1	+
7	19	80.0	122.1	+
8	21	86.6	108.5	+
9	20	81.3	114.4	+
10	21	2120	121.3	+
プロラン注射中止				
12	21	2040	77.6	+
14	21		62.0	+
16	20		54.6	+
18	21	2160	44.6	+
20	19		38.3	+
22	21		34.6	+
24	21	2070	40.3	+

II				
経過 日數	室温 (°C)	體重 (單位 瓦)	血小板數 (單位 萬)	増減率 (%)
前	17	1860	38.2	0
プロラン十日間注射開始(1cc宛)				
1	19	47.6	24.6	+
2	20	59.0	54.5	+
3	20	63.0	64.9	+
4	20	70.5	84.6	+
5	18	1980	99.6	+
6	21	127.0	160.7	+
7	19	128.3	232.5	+
8	21	94.0	235.7	+
9	20	91.6	146.1	+
10	21	1900	139.8	+
			87.0	+
			127.7	+
プロラン注射中止				
12	21	1930	74.0	+
14	21		45.0	+
16	20		51.3	+
18	21	1880	43.6	+
20	19		36.3	+
22	21		—	+
24	21	1910	39.0	+
			42.3	+
			10.7	+

III				
経過 日數	室温 (°C)	體重 (單位 瓦)	血小板數 (單位 萬)	増減率 (%)
前	17	1800	42.6	0
プロラン十日間注射開始(1cc宛)				
1	17	51.3	20.2	+
2	16	62.0	45.5	+
3	18	69.6	63.4	+
4	19	75.6	77.5	+
5	19	1830	79.6	+
6	18	78.3	86.9	+
7	19	88.6	83.8	+
8	19	89.6	108.0	+
9	20	72.0	110.3	+
10	21	1810	69.0	+
			74.6	+
			75.1	+
プロラン注射中止				
12	21	1850	60.3	+
14	20		64.0	+
16	20		56.3	+
18	21	1900	45.3	+
20	19		41.6	+
22	21		44.0	+
24	20	1910	38.6	+
			—	+
			9.4	+

第二表ノ四

IV						
経過 日数	室温 (°C)	體重 (單位 g)	血小板 數 (單位 萬)	増減率 (%)	判定	
前	17	1700	23.0	0		
プロラン十日間注射開始(1cc宛)						
1	17		30.6	33.0	+	+
2	16		32.3	40.4	+	+
3	18		31.6	37.4	+	+
4	18		36.3	57.8	+	+
5	19	1650	40.3	75.2	+	+
6	18		39.6	72.2	+	+
7	19		43.3	114.3	+	+
8	19		43.6	89.6	+	+
9	20		38.0	65.2	+	+
10	21	1690	35.6	54.8	+	+
プロラン注射中止						
12	21	1650	28.3	23.0	+	+
14	20		30.6	33.0	+	+
16	19		27.3	18.7	+	+
18	20	1630	24.6	7.0	+	+
20	21		20.6	-10.4	+	+
22	21		23.0	0	+	+
24	20	1680	28.0	21.7	+	+

第二表ノ五

V						
経過 日数	室温 (°C)	體重 (單位 g)	血小板 數 (單位 萬)	増減率 (%)	判定	
前	17	2030	40.0	0		
プロラン十日間注射開始(1cc宛)						
1	17		44.3	10.8	+	+
2	16		46.0	15.0	+	+
3	18		78.6	96.5	+	+
4	18		91.0	127.5	+	+
5	19	2080	113.6	184.0	+	+
6	18		83.6	109.0	+	+
7	19		80.3	100.8	+	+
8	19		70.3	75.8	+	+
9	20		65.6	64.0	+	+
10	21	2050	61.0	52.5	+	+
プロラン注射中止						
12	21	2080	68.0	70.0	+	+
14	20		63.6	59.0	+	+
16	19		56.0	40.0	+	+
18	20	2100	46.0	15.0	+	+
20	21		36.6	-8.5	+	+
22	21		38.3	-4.2	+	+
24	20	2050	41.0	+2.5	+	+

第二圖 甲状腺剝出家兔ニ於ケルプロラン十日間注射ノ
血小板數ニ及ボス影響(増減率ニヨリ示ス)

所謂腦下垂體前葉ホルモン・プロランノ血小板數ニ及ボス影響……(別府)

セシガ注射中止ニヨリ八日目ヨリ前値ニ復セリ。

第二例ハ注射直後ヨリ増加シ七日目最高ニ到リタルガ本例モ亦著シキ増加ヲ見タルモノニテ二三・五・七％ノ増加率ナリ、以後ハ稍々減ジ注射中止ニヨリ八日目ヨリ舊値ニ復セリ。

第三例モ亦注射後減ズル事ナク増加ヲ續ケテ八日目最高ニ達シ一一・〇・三％ノ増加率ヲ示シ以後稍々減ジテ七〇％前後デ略々一定シタ後中止ニヨリテ八日目ヨリ前値ニ歸セリ。

第四例又注射ニヨリテ増加シ七日目最高ニ達シ一一・四・三％ノ増加率ヲ有セシ後稍々減少シ注射中止ニヨリ八日目頃ヨリ前値ニ復セリ。

第五例ハ注射後第一、第二日目ハ些カ増加ハ呈セシモ尙ホ動搖範圍外ヲ出デザリシガ、第三日目ヨリ急激ニ増加シ、五日目最高トナリ一八・四・〇％ノ増加率ヲ示シ以後稍々減少シ注射中止セバ八日目頃前値ノ動搖範圍内ニ入リ。

之ヲ通觀スレバ注射開始後一日目ヨリ多クハ著シク増加ヲ始メ五日乃至八日目最高ニ達シソノ増加率ハ一一・〇・三％乃至二三・五・七％ヲ示ス。ソノ後ハ注射繼續スルモ稍々減少シテ増減ナク後注射中止ニヨリ八日目頃ヨリ前値ニ復セリ。

之ヲ例ニヨツテ各例ノ増減率ヲ遂日平均シテ曲線ヲ以テソノ變動狀態ヲ圖示スレバ第二圖實線ノ如シ。

之ヲ健康雄性家兎ニ於ケルプロラン連續注射ト比較スルニ概ネ一致セシガ最高ニ達セル後稍々減少シテ一定スル數値ガ健康家兎ニ比シ低ク注射中止ニヨリ前値ニ復スル日數稍々早キ二點ニ於テ僅カニ相違セルノミナリ。

第四章 總括並ニ考

甲狀腺ガ血液像ニ影響ヲ與フル事ハ諸家ノ認ムル所ニシテ、ソノ業績ハ枚舉ニ遑アラザルモ甲狀腺ト血小板トノ關係ニ到リテハ甚ダ少シ。Rosenbaumハ臨牀上ヨリ甲狀腺剔出患者ハ血小板ノ著シク減少スルヲ認メ、ソノ作用ハ甲狀腺ノ直接骨髓ニ及ボス影響ナリトシ、Bauerハ甲狀腺浸出液ニ血小板増加作用アルヲ認メテ甲狀腺ハ血小板増加物質

ヲ出スモノナリト云ヒ、W. S. Lewis ハ甲状腺剔出ニヨリテ血小板ハ著減ヲ來スト報ジ、錦織、祝ハ甲状腺物質試食ニヨリ血小板ハ増加シ、剔出ニヨリテ減少スルヲ認メ甲状腺ハ骨髓ヲ刺戟シテ血小板ヲ増成セシムル作用アリト謂ヒ綱島ハチレオイデンヲ投與シテ血小板ノ増加ヲ甲状腺剔出ニヨリ減少スルヲ認メ甲状腺ハ骨髓ヲ刺戟シテ血小板増生ヲ來ス他ニ脾臓モ之ニ關ルトナス更ニ石田ハ甲状腺物質ニハ血小板ニ對シテ相反スル作用ヲ有スル二種ノ物質アリ之等ハ骨髓ニ直接作用スルモノナラント謂ヘリ。山家ハ形態學的ニ血小板ヲ研究セシガ血小板數ニツキテハ山家モ亦チラヂンニヨリ血小板ノ増加ヲ認メ形態學的の見地ヨリチラヂンノ作用ハ造血機能ヲ充進セシメタルモノナリト稱セリ。

以上諸賢ノ所說ハ甲状腺ガ血小板變動ニ及ボス機轉ニツキテハ異論アルモ甲状腺ガ血小板ヲ増加シ、ソノ剔出ニ遭ヒテハ血小板ヲ著減スルモノナリトスル點ニハ一致ヲ見タリ。余モ亦雄性家兎ノ甲状腺ヲ剔出シ血小板變動ノ状態ヲ隔日、一ヶ月ニ涉リテ檢セシニ剔出後一日目既ニ著シク減少シ、爾後ハ徐々ニ減少シテ二十日目頃ヨリ一定スルヲ認メタリ。是ニ依リテ余ハ甲状腺剔出ニヨルソノ後ノ血小板ノ變動ヲ知悉シタルヲ以テ血小板數ノ略々一定セル三十日前後ノ期間ヲ擇ビテ十日間**プロラン**ノ一定量ヲ連續注射シ、**プロラン**中ノ血小板ニ關係アル物質ト甲状腺トノ關係ヲ知ラントセリ。ソノ結果ハ甲状腺ヲ剔出セシ場合ニ於テモ血小板數ニ著シキ變動ヲ惹起シ注射後一日目ヨリ増加シ始メテ五日乃至八日ニテ最高トナリ、以後稍々減ジタルモ尙ホ著シキ増加ヲ保チタルガ注射中止ニヨリテ八日目ヨリ注射前値ニ復セリ。

斯ル變動ハ、甲状腺ヲ剔出セザル場合ニ於ケル連續**プロラン**注射ト何等撰ブ所ナク、ソノ増加ノ時期、増加率ニ於テハ概ネ一致シ僅カニ最高トナル時期並ニソノ直後ニ於ケル血小板數ノ一定スル數値ガ稍々低キ點トニ相違ヲ見ルノ

所謂腦下垂體前葉ホルモン・**プロラン**ノ血小板數ニ及ボス影響……(別府)

ミナリ。換言スレバ**プロラン**中ノ血小板數ニ關係アル物質ノ作用ハ甲狀腺ヲ介セズテ發現スルモノナルヲ知り、即チ此ノ作用ハ**田中**ガ沃度新陳代謝ニ及ボス**プロラン**ノ影響ヲ檢シテ發見セル *Thyreotropes Hormon* トハ關係無キモノナリ。尙ホ前述ノ血小板數ノ最高トナル時期ノ稍々早ク現ハレタル事並ニ注射繼續中持續スル血小板ノ増加率ガ健常家兎ノ場合ニ比シ稍々低キ點ニツキテハ余ハ、甲狀腺ノ如キ血小板増成ヲ來サシムベキ臓器ガ剔出ニヨリテ缺除セルニ關ラズ之ヲ破壞調節スル種々ノ臓器ハ何等ノ損傷ナキヲ以テ、健常ノ場合ヨリモ早ク調節ヲ起セシニ由ルモノナラムカト思惟ス。

以上ニヨリテ甲狀腺**トプロラン**中ノ血小板數ニ關係アル物質トノ關係ヲ明カニセシガ血小板ノ破壞、調節ニ關係アリト見做サル、脾臓トノ關係ヲ次篇ニ於テ探ラントス。

第五章 結 論

余ハ甲狀腺剔出後ノ血小板數ヲ家兎ニ於テ檢シタル後妊婦尿ヨリ製セル所謂腦下垂體前葉ホルモン・**プロラン**ヲ甲狀腺剔出雄性成熟家兎ニ投與シテ血小板數ノ變動ヲ檢索シテ次ノ如キ結論ヲ得タリ。

一、甲狀腺剔出ニヨリ雄性成熟家兎血小板數ハ翌日既ニ著減シソノ後ハ徐々ニ更ニ二十日目頃マデ減少シ、爾後増減ナシ。

一、所謂腦下垂體前葉ホルモン・**プロラン**ヲ甲狀腺剔出雄性成熟家兎ニ注射セシニ正常雄性成熟家兎ニ注射セシ場合ト同ジク、注射後第一日目ヨリ増加シ始メ五日乃至八日ニテ最高ニ達シ、ソノ後ハ注射繼續スルモ稍々減ジテ略々

一定シ注射中止ニヨリ八日目前値ニ復ス。即チ**プロラン**ノ血小板ニ對スル作用ハ甲状腺ヲ介シテ二次的ニ現ハル、
モノニ非ズ。

主 要 文 献

- 1) **Rosenbaum**: *Zeitschr. für chirurgie* Bd. 1, S. 2380 (1825).
Sekretion, Bd. 2 (1929). 3) **錦織**: 辻内科甲状腺論文集 第1巻.
第3巻, 第2號. 5) **網島**: 岡山醫學會雜誌 第40巻, 第11號. 6) **石田**: 京城醫學紀要 第4巻, 第1號, 第8號,
第3巻, 第3號. 7) **Bauer**: *Zeits. f. angew. Anat. u. Konstitutionslehre*, Bd. V. H. 1—2. 8) **山家**: 日本内分
泌學雜誌 第11巻, 第1號. 9) **田中**: 日本内分泌學雜誌 第13巻, 第7號 10) **村尾**: 日本内分泌學雜誌 第6巻,
第11號. 11) **武藤**: 臺灣醫學會雜誌 第31巻, 第12號. 12) **植村**: 朝鮮醫學會雜誌 第19巻, 第11號.
13) **久保**: 日本之醫界 第12巻, 第20, 21, 22號.

Ovariectomie eine vorübergehende Zunahme der Blutplättchenzahl. Aber die Blutplättchenzahl nimmt dann allmählich wieder ab und schliesslich von der III. Woche ab post exstirpationem zeigt sie einen niedrigeren Wert als die Anfangszahl. Von da ab nimmt sie allmählich zu und etwa I Monat nach der Exstirpation kehrt sie zum Anfangswerte zurück und zeigt keine weitere Verschiebung.

2) Eine fortgesetzte Prolaninjektion ruft eine deutliche Zunahme der Blutplättchenzahl bei orchektomierten bzw. ovariectomierten Kaninchen hervor. Diese Wirkung des Prolan weicht kaum von der bei den gesunden männlichen Kaninchen ab. Aus diesen Ergebnissen darf geschlossen werden, dass es bei der Entfaltung der Prolanwirkung auf die Blutplättchenzahl keiner Vermittelung via Keimdrüse bedarf.

(Autoreferat)

Einfluss des sog. Hypophysenvorderlappenhormons (Prolan) auf die Blutplättchenzahl.

IV. Mitteilung. Beziehung zur Schilddrüse.

Von

Dr. S. Beppu

(Aus der I. Med. Klinik der Kaiserl. Universität zu Kyoto in Japan.

Exvorstand: Prof. Dr. K. Tsuji, Vorstand: Prof. K. Inoue)

Der Verfasser untersuchte zunächst den Einfluss der Thyreoidectomie auf die Blutplättchenzahl des Kaninchens. Darauf wurde Prolan den thyreoidectomierten, männlichen Kaninchen gegeben und die Veränderung der Blutplättchenzahl dieser Tiere beobachtet. Aus den Arbeitsergebnissen erkennt man folgendes:

1) Bei den männlichen ausgewachsenen Kaninchen bewirkt die Exstirpation der Schilddrüse schon am Tage nach der Operation eine deutliche Abnahme der Blutplättchenzahl. Bis zum 20. Tag post operationem nimmt die Blutplättchenzahl weiter allmählich ab und darauf zeigt sie keine weitere Zu- oder Abnahme.

2) Injiziert man den thyreoidektomierten, ausgewachsenen männlichen Kaninchen das Prolan (vom 30. Tag nach der Thyreoidektomie ab), so beobachtet man fast dieselbe Veränderung der Blutplättchenzahl der Versuchstiere. Es kommt nämlich schon vom 1. Tag nach der Injektion an zur Zunahme der Blutplättchenzahl. Diese Zunahme erreicht ihren höchsten Punkt am 5. bzw. 8. Injektionstag, darauf zeigt die Blutplättchenzahl eine leichte Abnahme, trotz fortgesetzter Prolaninjektion und dann bleibt sie in einem gewissen Niveau. Nach der Unterbrechung der Prolaninjektion nimmt die Blutplättchenzahl allmählich ab und 8 Tage nach der Unterbrechung kehrt sie zum Anfangswerte zurück. Aus diesen Ergebnissen schliesst der Verfasser, dass es bei der Entfaltung der Prolanwirkung auf die Blutplättchenzahl keiner Vermittlung über die Schilddrüse bedarf.

(Autoreferat)